



ぴゅあ峡南男女共同参画推進月間記念講演会を開催しました

ぴゅあ峡南では、山梨県が定める6月の男女共同参画推進月間にあわせ、6月6日に記念講演会を開催しました。

「男女共同参画がもたらす豊かな暮らし」と題し、講師には、静岡大学人文社会科学部社会学科教授の白井千晶先生を講師に迎え、ご講演いただきました。

講演会では、男女が手を取り合って豊かな暮らしを送るためには社会全体でどうしていくべきなのか、日本の文化や歴史的背景を交えながら考えていきました。

まず、日本は性差に伴う役割分担が残るジェンダー不平等の傾向が強い国であるということについてご説明いただきました。世界経済フォーラムによると、2023年の日本のジェンダーギャップ指数は、146か国中125位と2006年の公表開始以来、過去最低値となっています。日本は「男性は仕事、女性は家事」という性別役割分担意識の固定化が強い国であり、男性が育児休暇を取りづらかったり、家庭の優先を理由に女性が管理職に登用されないといった事例がよく見受けられます。このような性別による固定観念によって男性は育児への介入を、女性はキャリアアップを断念してしまい、はじめからそれぞれの機会が失われていると指摘されました。そして、この問題を解決していくためにはジェンダーの概念や多様性に対する理解を若い世代から育てていくことが何よりも重要だと強調されていました。性別による固定概念のほとんどが幼少期に定着してしまうことが多く、大人になる過程で身についた固定概念を取り払うのは非常に難しいと言います。そのような背景から、子どもの時からジェンダーについて学び、多様な価値観に触れることが、男女の固定概念をなくすことに繋がると解説されていました。

次に、少子化とワークライフバランスの関係性についても触れていきました。ワークライフバランスは一人ひとりが仕事とプライベートのバランスをどのように保つかを示す言葉としてよく使われますが、先生はワークライフバランスの達成と男女共同参画には深い関連があると話された上で、雇

用と勤務の柔軟性が女性の労働力参加率の増加や出生率低下をもたらさないために重要だと強調されていました。さらに、日本でワークライフバランスが浸透しない理由として、経営者側の意識の低さや若年非正規労働者の増加、働き世代である20代30代が収入への不安や職場への負担を理由に、育児・介護休業を取得できないことなどを挙げていました。特に、非正規労働者の比率が高まっていることで、正規労働者の長時間労働が深刻化していることに警笛を鳴らしていました。時代とともに社会の仕組みが変わってきていること、誤った価値観を徐々にアップデートしていくことが男女共同参画を進めていく上で重要だと改めて気づかされました。

また、日本におけるワークライフバランスが海外諸国と比較して非常に遅れていることも指摘されていました。先進国の中でもワークライフバランスが進んだ国としてスウェーデンを例に挙げ、スウェーデンでは、女性は勿論男性も高い確率で育児休業を取得すること、午後5時以降は家族と交流するための時間という考え方が、共通認識として捉えられていることをご紹介いただきました。日本と比較してスウェーデンは、働き方という点において柔軟であると同時に、「仕事は家事と同じ生活の一部である」という考えが深く定着していることを学びました。

最後に、男女共同参画を進めていく上で鍵となる多様性について触れていきました。豊かで活力ある暮らしを維持していくためには、性別に関わりなく個性や能力を十分に発揮できる社会の実現や環境づくりが必要であるとし、その一例として多世代型介護シェアハウス「はっぴーの家ろっけん」を動画で紹介いただきました。性別・年齢・国籍に関わりなく誰もが自由に出入りができ、家族のように接している姿が印象的であり、多様な生き方を当たり前とする意識をインベーションしていくことが男女共同参画に繋がるきっかけになることを学びました。

今回の講座を通じて、社会全体として男女間の役割についての固定概念を少しずつ変えていくこと、自分の考え方を「当たり前」や「正しい」と前提にしないことが男女共同参画社会実現への第一歩と感じ取っていただけたら幸いです。

